Full-Scape Wizard

１章＿村編

　暁（あかつき）メグルは２時間前に訪れたパーキングエリアの売店に掲載されていたポスターを思い出していた。

　赤の太文字ゴシック体で書かれた『シートベルトを締めよう。命は１つ！』のメッセージ。背景にはボンネットから運転席がプレスされたかのようにペシャンコになった軽自動車の写真。

　メグルはシートベルトを締めようが、締めてなかろうがどっちみち死ぬだろう。そう思いながらポスターを眺めていた。

　休憩から２時間後、高速道路を降り、見慣れた一般道を乗りなれた軽自動車で進む。メグルに目指す先は自宅である。

　右側には公園がある。メグルにとっての１番古い記憶は母の手を握りながらその公園から自宅に戻る風景だった。公園沿いの道は小中高の通学ルートでもあり、通勤ルートだった。

　公園の入り口に差し掛かるちょうどその時、公園からボールが車道に転がってきた。反射的にメグルはブレーキを思いっきり踏み込む。いわゆる「かもしれない運転」ってやつだ。子供が飛び出してくるかもしれない。彼はそう思った。

　だけども、子供は飛び出してくることはなかった。メグルは5歳ほどの男の子が公園の入り口から左右の安全確認をするのを見た。

　最近の子はしっかりしてるなぁ。そう感心したと同時に、背中に衝撃が走る。メグルの軽自動車は追突され、その勢いで反対車線に突っ込んだ。目の前に迫ってくるのは４トントラック。

　視界がスローモーションになり、今まで見てきた風景が次々とよみがえってくる。そんな走馬灯の最後に今まで行ったことの風景が入りこんできた。風車、畑を耕す牛、藁ぶきの屋根……。やがて視界が白くかすんでいく。メグルの意識はそこで途切れた。

　まぶた越しに太陽を感じる。穏やかな風に吹かれて揺れる芝草がこそばゆい。

　メグルが意識を戻すと丘の上に寝転んでた。

　周囲には風車、畑を耕す牛、藁ぶきの屋根……。

「この景色は、走馬灯の最後の……。テレビで見た臨死体験と随分違うな」と辺りを見渡しながらメグルはつぶやく。

　周りの風景はファンタジー映画やRPGに出てくる農村のようだった。

　メグルは丘を下り民家のある方を向かっていった。轍に沿って歩いている中で道標を発見した。それには今まで見たこともない文字が書かれていた。メグルは不安を思えながらも歩き続ける。

　石橋を渡り、左右に畑がある道を進む。人影はあるが、畑の奥の方で作業しているため声は届きそうもない。どことなくメグルを避け風にも感じられる。

　家の庭先で息子・娘と一緒に、革をなめす男がいた。メグルが声をかけようと近づこうとすると男は子供たちに家に入るように指示し、近くに立てかけていた鉈を手に取った。

　男はメグルに向かって怒鳴る。話す言語はメグルには理解不能だったが。伝えたいメッセージは予想がついた。

「俺の家族に近寄るな。さもないと叩き切ってやる」

　男の怒鳴り声につれれてか、周りに村人たちが集まってきた。各々、彼らなり武器――たいていは農具――を携えている。その中の一人がメグルにピッチフォーク――干し草に突き刺すフォークみたいな農具――を突き付けてきた。身を守ろうとして、メグルは両手を突き出す。その時、メグルは彼らの目に恐怖が浮かんだのを感じ取った。と同時にメグルはタックル受けて地面に倒れこむ。すぐさま、村の男たちの華麗なチームワークによってメグルはロープで縛れらていった。

　ロープで拘束されたメグルは農村の中央に位置する広場につれていかれた。周りには村人が集まっている。

　感じられる雰囲気は２つ。１つ目は異邦人に対する警戒・恐怖。２つ目はその異邦人をとらえた勇敢な男達への称賛だ。特にメグルにタックルをした若者は英雄扱いのようだ。内容はわからないが「へロス」と何度も掛け声が聞こえる。彼の名前だろうか。

　端でメグルをしきりに確認しながら、白熱した議論をしている一団があった。議論がひと段落すると、長老と思しき老人とローブを身にまとった壮年の男がメグルに近づいてきた。

　老人はロープに縛られたメグルの目をじっと見た。ローブの男に目配せをし、先ほどまで議論していた一団に戻っていった。

　ローブの男はメグルを縛るロープを手を触れた。男はここじゃないどこかを見るような、はるか遠くに焦点を合わせるような、そんなそぶりを一瞬だけ見せ、小声で何かをつぶやいた。するとメグルを縛っていたロープの一部が焼き切れた。

　ローブの男はメグルに向かって、自分についてくるように身振りで伝えた。

　メグルが立ち止まっていると、さっき見せたような遠くみるそぶりをし、何かをつぶやいた。ロープが焼き切れる時とは別の言葉を。すると、メグルの背後から強い風が吹いてきた。風に押されてメグルは一歩前に進んだ。

　メグルは周囲を見渡したが、他の人は風にあおられている様子は見受けられない。風は彼一人に対して吹いている様だ。

　メグルはローブの男に従い、彼の後を歩いていった。

　メグルはローブの男の家にたどり着いた。村の北東に位置するレンガ造りの建物だ。

　ローブの男はメグルを招きいれた。男はメグルをダイニングまで案内し、椅子に座るように促す。

　メグルが椅子に座ると男が目の前にしゃがみ込んだ。男がメグルに向かって手をかざし３回、それぞれ別の言葉を唱えた。はじめは目、次は口、最後に耳。見ざる聞かざる言わざる。そんな言葉がメグルの頭をよぎった。

　男はメグルの向かい側の椅子に腰かける。

「私の言っていることが理解できるか？」

　日本語でメグルに向かって誰かが声をかけてきた。メグルはあたりを見回した。だが、室内にはメグルとローブの男の二人だけしかいない。

「その様子だと君の翻訳魔法は機能しているようだな。話しかけているのは――」ローブの男は自分を指さして言葉を続ける。「私だよ」

　メグルは驚きのあまり開いた口がふさがらない様子だ。舌が回らず思ったように声が出ないのでうなずき、応えた。

「私の名はエデュー・ジェザーヴィーヌ。魔術師だ。君の名は――」

　エデューの言葉を遮ってメグルがしゃべりだす。「誤解です。信じてください。おれは傷つけるつもりなんてないんです。そもそも、ここどこな――」言い終わる前にエデューが止める。

「無実なのは分かった。いったん落ち着け。……よし、では答えてくれ」

「……えーと、何でしたっけ？　その……魔術師さん？」

「エデューだ。君の名前は何か質問している」

「みすません。おれはメグルっていいます」

「珍しい響きだだな。どこから来た？」

「千葉県」

「チバケン？　知らないな。もっと大雑把な区分で教えてくれ。もしかしたら分かるかもしれない」

「日本」

「もっと広く」

「東アジア」

「もう一声」

「え!?　これより広い区分となると……。地球になると思います」

「それはスケールが大きすぎる。この惑星そのものじゃないか。少し考えさせてくれ」

　エデューが立ち上がり、室内を往復しながら考えを口にだす。メグルは断片的に単語を聞き取った。新大陸、予言、地球、偶然の一致。エデューはふと足を止めた。

「おそらく君にとっての地球と、私が認識している地球は翻訳魔法の結果偶然『地球』という単語に集約されたのだろう。人々が住む惑星を単語としてな。だが、まったくの別物だろう。君は異なる世界からやってきた訪問者だ」

「異世界転生。いや、異世界転移ってわけですか」

「呑み込みが早いな。君の世界にも異世界からの訪問者が来るという予言があるのか」

「予言ってわけじゃないですけど、似たような話はたくさんあります。最近では『来る』より『行く』パターンが主流ですね」

「予言がどうこう言ってましたけど、それがおれが捕えられて、魔女裁判みたいな状況になった理由ですか」とメグルが問いかける。「魔女裁判が何なんかわからないが、大体は予言による先入観だろう。予言の内容をざっくり言うと、『来訪歴1296年にだれもたどり着けない遠くから来た者が災いをもたらす』といったところかな」

「――つまり、災いをもたらす者とやらが、おれだとおもってる？」

「そういうことだ。だが、決め手になったには――」エデューがメグルに向かって、手を突き出す。手は野球ボールの握るように親指・人差し指・中指で虚空を鷲掴みしている。「アモル・アクシー」

　エデューの三本の指の間に稲妻が走る。魔法によるスタンガン。メグルはそう思った。

「君の身を守る仕草が攻撃魔法の予備動作に見えたのだろう。こんな感じに、攻撃魔法は相手に向かって手を突き出すものが多い。おそらく」

　メグルは農具を突き付けられたときに、両手を前に出して防御しようとしたこと思い返した。

「誤解ですね。おれは魔法なんて一切使えませんよ」

「そうとも限らないぞ。魔法自体は使うだけなら難しくない。ただ、たいていの場合は魔法を使うよりほかの手段を使う方が手っ取り早い。例えば、広場で私が君を縛っているロープを焼き切っただろ。あの時使った魔法も９割の人は使うだけならできる。ただし、火力が低すぎて焼き切るまでにじわじわと２時間かかる。そんなことしているんだったら、ナイフで切った方が早い。要は、ほとんどの人間は魔術師なんだ。だけど、幾つも目的を達成する手段がある中でわざわざ魔法を選びたくなるほど、魔法を上手に使える人は限られているってだけだ」

「それって結局、まともに使えるのは限られたになりませんか。たぶんおれは、多数派の一応魔法は使えなくもない人だと思いますよ。下手すれば使えない方の１割かも」

「簡単な魔法だったら教えてやるが、どうする？」

「たぶん時間の無駄たと思いますけど……」

「そうとも、たいていの人は適性無しだ。でも考えてもみろ。失敗した場合は普通のまま、いわば現状維持だ。成功したら、晴れて魔術師の仲間入りだ。分がいい賭けだと思わないか」

　エデューはメグルが応える前に、彼の首根っこをつかみ庭先に連れ出した。

　庭先でエデューがメグルに、オレンジの木を示しながら説明を始める。

「ちょっとしたゲームだ。物理衝撃魔法でこの木を揺らして、みかんを落とす。落としたオレンジは君のものだ」

　メグルはオレンジの木を観察する。高さが２メートル。幹の太さが30センチほど。自分の二の腕より少し太いくらいか……。オレンジはオレンジ色ではなく青い。熟してためか、青い状態で食べる品種であるのかは不明だ。そういう品種であってくれとメグルは思った。

「さてと、魔法の使い方についてだ。魔法を行使には３つの要素が必要になる。印、呪文、そして魔力だ」

「まずは印について、魔力を放出するための特定の形のことだ。今回を教える魔法は手をこの形にする」エデューがオレンジに向かって手をかざし、メグルを呼び寄せて手の形を見るように促す。

　メグルは手の形を確認する。エデューの印――手の形――は張り手や掌底に酷似している。掌を正面に向け、各指の第一関節と第二関節を曲げている。

「そして、呪文を唱える。カイナ・オウ！」

　オレンジが何かにぶつかったかのように振り子のように揺れ、やがてオレンジは揺れに耐えられずに地面に落下した。

「とまぁ、こんな感じだ」

　メグルもオレンジに掌を向け。深く息を吐きだす。肺に息が戻ってきたの確認して「カイナ・オウ！」と声を張り上げる。……が、オレンジは落ちなかった、そもそも揺れてすらなかった。

「そういえば、魔力について言うのを説明し損ねたな」エデューが笑いながら言う。「どうやって、魔力を引き出すつもりだったんだ」

「強く念じれば出せるものかと。落ちろーって感じで」

「残念だが念じるだけは魔力は引き出せない、私たちが用いる魔力は土地から引き出すんだ」

「土地……ですか」

「そう、土地だ。土地は魔力を持っている。我々魔術師は土地から魔力を引き出し魔法を行使する。引き出す魔力を方法は、その土地は思い浮かべることだ。また、同じ土地から連続して魔力を引き出すことはできない」

「試してみます」

　目を閉じる。メグルが思い浮かべているのは県境の川の上を通る橋の風景だ。川の両側面に土手があり、頂上はサイクリングロードなっている。土手の川の間の茂み、野球グラウンド。出ての外側には田んぼが広がっている。そして、その場で見ているかのように緻密な映像を自分の内側に描き出す。

「カイナ・オウ」

　今度は成功した。やりすぎてしまったとも言えるかもしれない。葉をあらかた吹き飛ばし、幹をへし折り、オレンジの半数を押しつぶした。

「あの木ってへし折っても問題ない木ですよね」呆然としながらメグルが問いかける。

「気にするな、来年からオレンジを食べたくなったら、市場で買う必要があるようになっただけだ。それはそうと、予想以上の出来だ。初めてだよな？」

「初めてですよ、わざわざ嘘なんてつきません」

「どうだ、弟子になる気はないか？」

「少し考えさせてください。すこし風を浴びてきます」

　メグルはオレンジの中から、中身が果実が汚れていないもの拾った。

「落としたオレンジはおれのものでいいんですよね」

　メグルはエデューから背を向けて歩き出した。

　メグルは橙色の夕日焼けの道を青い果実を片手に歩く。そういえば、橙色とオレンジ色って何が違うんだ。彼はそんなことを思いながら、青いオレンジの皮をむいていく。現れた果肉は薄い黄緑色だ。その中の一房を口に運ぶ。

「うっ」あまりの酸っぱさに路肩にオレンジを吐き出した。「やっぱり、まだ食うべきじゃないや」

「悪魔め、エデューさんのところから逃げ出して来たな」

　メグルは後ろから声をかけられる。振り向くとそこには、昼間メグルにタックルをかけ、村に広場ではへロスと呼ばれていた青年が立っていた。メグルはしどろもどろに弁明を始めた。

「違うんだ……。誤解……、誤解です！　逃げてなんかいません。むしろ、弟子入りする方向で考えてるくら――」

「嘘つけ！」メグルの言葉をさえぎりへロスが言い放つ。「エデューさんに正攻法で敵わないと知って、周りを騙す作戦に切り替えたんだろ。怪しげな魔術で俺たちの言葉を使いやがって」

「言葉が通じるのはそのエデューさんのおかげなんだけど……」

「お前の言葉になんか聞くもんか！」へロスの力強い声が響き渡る。

　一連の会話をからメグルは対応を考えていた。これはおれからは絶対説得できないやつだ。エデューさんの口からみんなに説明してもらう必要がある。そして彼がいるのが、この英雄君の向こうなんだよな。今のところは素手みたいだけど……、いや、取っ組み合いたぶんこっちが負ける。

　ふと気が付くと、へロスに後ろから援軍が駆けつけてくるのが見えた。２人の若い男で、一人はロープを、もう一人は鎌を携えている。

「みんな、こっちだ！　あいつを捕まえるぞ！　あいつの声には耳を貸すな、俺たちを騙すつもりだぞ」へロス君が援軍達に伝える。

　メグルは男達とは逆の方角に走りだした。その方角はエデューの家への方角とも逆だった。

　ルナエは鎌を片手に、エデューの家を目指していた。

「俺たちはあの悪魔を追いかける。お前はエデューさんを呼びに行ってくれ」へロスからの指示を思い返す。

　ルナエはエデューの家にたどり着いた。

「なんだこれは？」へし折れた木と散らかったオレンジを見てルナエがつぶやく。戦いの跡だろうか。

「んー」庭先にいたエデューがオレンジを片手に口をすぼめながら、ルナエに手を振る。口に入っていたオレンジを飲み込み。「どうした、ルナエ。何か用か？」

「助けてください。仲間があいつを追っていて」

「あいつって昼間にロープでぐるぐる巻きにされていた“あいつ”か」

「その“あいつ”です。これはあいつがやったんでか？」へし折れた、オレンジの木を示しながらエデューに問いかける。

「ああ、あいつの仕業だ」

　ルナエの顔が青ざめる。あいつを本気で怒らせるとまずいんじゃないか。

「よし分かった。私も助けに行こう」ルナエの表情を見てエデューがルナエの肩に手を置く。「お前さんも一口どうだ」そう言って青いオレンジを差し出す。

　ルナエはオレンジを一房ほおばり、口をすぼめる。「酸っぱい」

「うん、やっぱりまだ熟してないよな」エデューがつぶやく。

　二人はメグルと彼を追いかけるへロス達のもとに走った。

　メグルへへロス達から逃げ続けて、農村中央部の広場までたどり着いた。

　走りながら後ろを振り返る。追ってくるのはへロスとロープの男だ。

　へロスとロープの男は二手に分かれて、メグルを追い立てる。土地勘とチームワークのかいあって、二人はメグルを袋小路に追い詰める。路地の奥は出店のテントが保管されており、手でどかす時間はメグルにはなかった。

　二人はメグルに襲い掛かる。メグルは手にしていたオレンジ握り潰し、果汁をロープの男に吹き付ける。

「うっ……」ロープの男が壁に体をあずける。「目が……、へロス、すまない。少しの間そいつを抑えてくれ……」

「任せろ」へロスがメグルに飛びかかる。

　メグルは地面に押し倒される。倒れた時の衝撃でオレンジの路地の奥に放り出された。へロスはメグルに馬乗りになる。

　メグルがへロスを見上げる。武闘的な方法ではどうにもならないなこれは。可能性があるとしたら魔法だ。でも、オレンジの幹をへし折る威力だ。人に打てない。威力を落とすには……。

　エデューの言葉を思い出す。「引き出す魔力を方法は、その土地は思い浮かべること」

　本当に一瞬だけ思い出そう。おれは今、インターチェンジを出たところだ。メグルは一瞬だけ目をつぶる。まぶたの裏側に山のシルエットが焼き付く。

「カイナ・オウ」メグルはへロスに掌底をへロスに向けて唱えた。

　衝撃によってへロスがメグルの上から転がり落ちる。彼はその勢いのまま、壁に頭をぶつけた。

　へロスがうめき声を上げながら、手の平で頭をさする。違和感を感じ手の平を確認すると、血でにじんでいた。

　メグルはへロスを視界から外し、袋小路から逃げ出す。追手だった二人は追いかけてこないようだ。

　メグルは周囲を確認しながら路地を走る。建物の死角からこちらに近づいてくる靴音が聞こえてきた。

　メグルは衝撃呪文を放つ準備をする。建物の影から刃が光る。

「思いのほか、やんちゃじゃないか」

　メグルの真後ろから男の声がした。回り込まれた？

「カイナ・オウ」メグルは即座に背後の男へ衝撃魔法を放つ。

「テラス・カーキネン」それと同時に男も呪文を唱える。

　メグルと男との間に光の壁が出現する。壁の角度はメグルから見て、斜め上を面を向けている。メグルが放った衝撃波は光の壁を反射し、メグルの頭の上に位置する建物の煙突を砕き割った。メグルの頭上に、四散したレンガが落下してくる。

「カイナ・ティング」男が別の呪文を唱えると、煙突だったレンガが空中で静止する。

「さて、ほんのちょっとばかりお仕置きが必要だな」光の壁が光の粒子となって、空に拡散していく。現れたのはエデューだった。

　エデューが薄ら笑いを浮かべながら、メグルの額に卵を握ったかのような軽く握った拳を突き付ける。

　メグルは反射的に目をつぶった。

　……、……。コツン。

「でこぴん……!?」メグルが目を見開く。

「だから言っただろ。“ほんのちょっと”お仕置きが必要だと」エデューが笑いながら答える。「あ、そうだった。ここから離れるぞ。そろそろ魔法が途切れる」

　メグルたちはレンガが浮遊している、エリアから歩み出た。その数秒後に、レンガは重力に従って地面に落下した。

　ふと気が付くと、周りには人だかりが出来ていた。いぶかしげにメグルを見つめる。

「すまない、うちの弟子が迷惑をかけた」エデューが周りの人たちに説明を始める「正当防衛のつもりだっただが、上手く加減ができなかったらしい。基本的には優しいやつなんだ。さっきの衝撃魔法を威力を見たか、かなりの威力だ。彼には素質がある」

　周りの人たちは一応は、納得したようだ。メグルの扱いについては彼に一任すると。

「さてと」エデューがメグルに向き直る。「答えを聞きそびれていたな、どうだ？　私の弟子になるか？」

　エデューが握手の為の手を差し伸べる。

「さっきから弟子になる前提で話を進めてましたよね」メグルは握手に応じる。でも、さっきの説明がなかったとしてもおれは同じことを答えただろう。

「よろしくお願いします。エデュー師匠」

２章＿弟子入り直後から出発まで

　一連の騒動の後、メグルとエデューの師弟はエデューの家に戻った。

「今日から、ここがお前さんの部屋だ」とエデューがメグルに部屋を案内する。

　案内された部屋を二人部屋だったようで、ベッドと机が左右対称で配置されていた。向かって左側の範囲は中身が空っぽだったが、右側の範囲は持ち主のものが残ったままになっている。

「左のベットを使ってくれ」とエデューが言い残し、去っていった。

　メグルは入り口から見て右側の椅子に腰かけた。もう一方の椅子の背もたれには『アプレン』と彫刻されている。自分が座っている椅子はもともとは誰のものだろうと確認すると『ブーリアン』と記載されていた。

　メグルは兄弟子のものだった布団に潜り込んだ。部屋のほこりっぽさが気になるものの、眠気には耐えられなかった。細かいことは明日考えよう。

　翌朝、目を覚ましたメグルはあることに気が付く。椅子に彫刻されているはずの『ブーリアン』の文字が解読不能の記号に置き換わっていたのだ。それだけでは無く、もう一つの椅子の『アプレン』の彫刻やアプレンの遺留品も読めない文字に置き換わっていた。正確には『置き換わらなくなった』と表現すべきだろう。

「翻訳魔法の効果が切れている……」とメグルがつぶやく。

　メグルが部屋で出て、片っ端から部屋をノックして回る。

　寝室からエデュー出てくる。何かしら喋ってはいるがメグルには理解できない。唯一わかるのは彼を示す『メグル』という名詞だけだ。

　エデューは昨夜と同じように目・口・耳の三か所に翻訳魔法をかけた。

「これで、よしと。どうだ、聞こえるか」とエデューが言う。メグルにも理解出る声としてだ。

「大丈夫、聞こえます」

「言い忘れていたが、翻訳魔法は数時間意識がなくなると効果が切れる」

「――で、切れたときは再度、師匠にかけ直してもらうと」

「そういうことだ」

「ということは、弟子になるならないの以前に師匠のそばから離れられないじゃないですか」

「まあ、そうなるな」

　そのあと二人は朝食をとり、身支度をして、村の中央部へ向かった。先日のごたごたで破壊した建物を治すためだ。

「そうだ、口と言葉が一致してないんだ。洋画の吹き替えみたいに」ふと、メグルが気が付いた。

「ヨウガノフキカエが何だかは知らないが……、翻訳魔法は言葉が耳に入った瞬間に魔法でその人間が理解できる言語に置き換える魔法だ。だから、声と言葉が一致しないぞ。もちろん私から見ても君の口と言葉は一致していない」一呼吸おいてエデューが続ける。

　エデューはまず向かったのは、煙突が破壊された現場はなく、左官屋だ。バラバラのレンガと成り果てた煙突をもとに戻すには、地道にレンガを積み上げてモルタルで隙間を埋めるほかないようだ。

「魔法で、元に戻すことは出来ないんですか」メグルがエデューに質問する。

「魔法で煙突の形に支えることは可能だ。だが、魔法で支えているだけでは、魔力が途切れた瞬間に崩れ落ちてしまう。私に出来るのはあくまでサポートだ」

　エデューは、左官工を呼び出す。

　作業現場へと向かった。

　煙突の修復作業は順調に進んでいった。メグルが散らばったレンガをかき集め、エデューがカイナ・ティングという物体を浮遊させる魔法で保持し、左官工がモルタルで隙間を埋めながら煙突の形に積み上げてく。

「そいつが新しい弟子か？」左官工がエデューに話しかける。「弟子を取るつもりはないとか、昔、言ってなかったか」

「昔のことだ。弟子ロスも１０年も経てば消えてなくなるさ」

「ならいいんだ。そういえば、堅物の方は元気にやってるのか？」

「（TODO：地名）で魔法塾を開いているらしい」

　三人は煙突の修復作業を終えた。

　その日の食卓でエデューはメグルに質問を投げかける。

「こっちの世界に来た細かい経緯を聞いてもいいか」

「いいですよ。えーと、どこから話すかな……。あれは半年前のことで――」

　仕事を辞めて、いや、辞めるように仕向けられて……。まぁ、とにかく、仕事を辞めました。

　今までの睡眠負債を全力で返すかのように布団に横たわること１ヵ月。１ヵ月経って動く元気が出てきたが、だけれども、再度仕事をする気は一向に起きなかったわけです。

　――で何を血迷ったのか、マイカーで日本一周の旅を始めました。理由なんてないです。ただ、いろいろな風景を眺めるのが好きだけで。あとは、こんな無駄なことに湯水のように時間を投入できる機会は当分訪れないと思ったからですかね。

　ルートは関東から時計回りに関東、から太平洋側を進んで、近畿、四国、九州、日本海側から、中国、北陸、東北、北海道、ぐるっと太平洋側に行って、関東まで戻りました。今思えば、ルートは逆の方がよかったかな、途中で予算が足りないことに気が付いて、車で寝泊まりしてたんですが、寒くて凍え死ぬかと思いました。予算が問題だと言われればそうですけどね。

　そして、出発地点の千葉に戻ってきました。千葉までは戻ってこれたんですよ、さらに言えば自分の町まで戻ってきています。

　ところが、不幸にもトラックにはねられてしまう。正確に言えばはねられそうになってしまう。

　駆け抜ける走馬灯。で、気が付いたら『こっち』に来ていました。

「――経緯はこんな感じですね」

　メグルは説明を終えた。

「やっぱり、戻りたいと思うか？」

　メグル、少し考えてから答える。

「人並みには、戻りたいとは思いますよ。でも、おれが帰ろうが帰らなかろうが、これといった問題はないでしょうね」

　２日後、メグルは老朽化ししたお屋敷を衝撃波魔法で破壊していた。

　このお屋敷、かつて偏狂な金持ちが増築に増築を重ねて肥大化した建築だ。彼が亡くなった以後、３回の住人の入れ替わりがあったが、そのたびに３年も経たないうちに幻聴や不眠症を訴えて皆が去っていった。

　エデューがメグルに指示を出す。「この、壁一面に肖像画がかけられた部屋を頼む」「次は寝室だ」「この、山羊の頭骨と謎の人形が並んでいる部屋を頼む」

「なんとなく、不吉なところだけ任されている気がするんですが。呪われたりしませんよね」

「……。いざとなったら精神を落ち着かせる魔法をかけてやるから安心しろ」

「一度おかしくなる前提じゃないですか」

「ところで、カイナ・オウは今日のうちに何回打った？」

「え？」強引に話の方向転換され、戸惑いながら考える。壁１面に対して大体２発放っているから……。「20回は打っているはずです」

「あと、何回打てる？」

「100回ぐらい」

　エデューが目を見開き、つぶやく。

「風景のストックなら、トップクラスじゃないか」

「ええ、風景を覚えるのは得意なんです。人の顔や教科書の中身は全然覚えられないんですけど、迷子になったこと生まれて一度もなかったです」

「あながち、予言は間違いじゃなかったかもしれないな」

「素人のゴリ押しなんてどうにでもなるでしょう。」

「そうとも限らないぞ。１対１弱点を突いて終わりだが、複数戦ならその風景のストックも十二分に活用できる」

　休日のある日のメグルとエデューはエデュー宅の書斎にいた。エデューが話を切り出す。

「正式に魔法使いになりたいと思わないか」

「正式？」メグルが聞き返す。「魔法使いにも正式な奴とそうじゃない奴がいるんですか？」

「いるぞ」

「――となると」メグルは自分を指さして「おれはモグリの状態ですか」

「グレーゾーンだ。弟子として正式な魔法使いの目が届くところで魔法を使う分には違法ではない。魔法使いとして認められるためには《機関》で登録する必要がある。その《機関》があるのがこの国の首都だ」

　エデューは本棚から地図を取り出し、机に広げる。地図の真ん中の四方八方に道路が伸びている一番大きな街を指さし「ここが首都だ」とエデューが言う。そして、南方の農村が点在するエリアから赤い丸が書きこまれた場所を指さし「ここがこの村だ」と言う。

　首都と今いる村の間に、バツ印でが記載されている箇所がある。

「師匠、ここは埋蔵金か何かですか」メグルをバツ印を指し示しながら質問する。

「そこは戦場の跡地だ。７年前に停戦し、それから今日まで魔法使い間での戦いは発生していない。……まぁ、表上はな」

「よかった……。こっちに来たのが戦時中じゃなくて」

「それはそれとして、首都にもう一つある。国立図書館と《機関》に所属している研究者達だ。お前さんが元の世界に戻る方法を探るならこの辺の協力が必要になるだろう」

「この世界で残る。元の世界に戻る。どちらにしても首都に行く必要があるってことですね」

「そういうことだ。《機関》での登録には、色々な魔法を身に着けてもらう必要があるが、旅の最中にでも覚えてもらうさ。先生役にはいくつか候補がある」

　メグルを首都につれていくと決めた次の日から、２人は旅の準備を開始した。

　初めに手を付けたのは足の確保だ。馬売りを訪ね、馬小屋の中から旅の相棒となる馬を選び出す。メグルは栗毛の牡馬、エデューは黒鹿毛の牝馬を選んだ。

　糧食として、市場から買い込んでいく。

　メグルの使用する用具の一部はアプレンが残していたものを利用することにした。

　出発の日になった。

　二頭の馬とそれにまたがる二人。それをそれを見送る人々は見送りの言葉を贈る。。

「故郷に帰れなく方法が分かるといいな」

「駄目だったらいつでも、この村に戻って来いよ」

「行ってきます」に手を振りながらメグルが応える。

　メグルとエデューは馬に拍車をかけ、旅路を駆けていく。